2025年9月7日（聖霊降臨後第13主日・特定18、C年）
メッセージ

「あるべき」でなく「あるがまま」

（ルカによる福音書14：25-33）

司祭ヨセフ太田信三

十字架が待つエルサレムへの旅に、大勢の群衆が一緒について来ました。主イエスはその群衆の方を振り向き、弟子の条件を語ります。弟子とは、「イエスのもとに行き、父や母、そして自らの命をも憎み、自分の十字架を背負い、イエスの後を行く」人だというのです。このことから、十字架を殉教というと非日常的な感じがしますが、十字架とは決して非日常ではない、ということが分かります。それにしても、今日のお話は、あまりにも身近なものを用いて語られており、それゆえに難解に感じられます。一体、イエスは何を言っているのでしょうか。

あるがままの人間は様々な欠点を持っています。それゆえ、受け入れ合うことは困難です。しかし、私たちが担うべき十字架とは、共に生きるべき、欠点に満ちた「あるがままの相手」のことです。目の前の「あるがままの相手」と共に生きることは、究極的には、イエスがそうされたように、自らの命を相手のために捧げる生き方です。それが「自分の命を憎む」ということであり、「自分の財産をことごとく捨て去る」ということです。「自分の財産」とは、お金や所有物だけではありません。自分が「命」ほどに大切だと思い込んでいる理想や価値観、夢と言ったものも含まれます。突き詰めると、それらは自分の考える価値を中心にした生き方へと繋がるものです。それを手放し、「あるべき」ではなく「あるがまま」の相手と生きること、そういったものをすべて捨てててでも、「あなたと一緒に生きる」ことを選んで生きようとすること。それこそが、イエスの後に従うということなのです。

たとえば、私たちは日常において、お互いに「役割」や「あるべき」とされるところに自らや他者を置くことで、安心できる世界を作り、その中で生きています。しかしそこに、「あるがままの相手」との関係を阻害するものが生じます。人が勝手に「あるべき」を作り上げてしまい、父親像、母親像、妻像、子ども像といった理想や姿との比較のなかで、私たちはそこに収まらない他者を受容できず、「あるがまま」を受け入れることができなくなってしまうのです。イエスは、その「像」を憎みなさい、と言っているのです。

「あるがままのあなたと共に生きる」には、今日の福音の後半で「まず腰をすえる」と二回繰り返されているように、まず腰を据え、今まことに大事なことは何か、向き合わなければなりません。「私と神」、「私と隣人」との関係を妨げているものは何かと、自らの信仰生活を省みるなら、このイエスの言わんとしていることが分かるのではないでしょうか。それらを一旦捨て、神の思いに従う歩みが求められています。